

東京都狛江市の下部更新統飯室累層よりダイカイギュウの全身骨格化石の発見

甲能直樹*・薬師大五郎**・小林英一**

* 国立科学博物館・** 明星学園高等学校

Discovery of a skeleton of the *Hydrodamalis* sea cow from the Lower Pleistocene Imuro Formation, Komae City, Tokyo, central Japan.

Naoki KOHNO*, Daigoro YAKUSHI** and Eiichi KOBAYASHI**

*Department of Geology and Paleontology, National Museum of Nature and Science, 3-23-1 Hyakunin-cho, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-0073 Japan (kohno @ kahaku.go.jp); **Myojo Gakuen Senior High School, 4-15-22 Mure, Mitaka City, Tokyo, 181-0002 Japan

Key words: Sirenia, Dugongidae, *Hydrodamalis* sp., Imuro Formation, Early Pleistocene, Japan

2006年9月2日、東京都狛江市の多摩川左岸河床において、薬師と小林は下部更新統飯室累層から海牛類の全身骨格化石を発見した(図1~3)。化石は骨格の大部分が河床面に剥出した状態(図2)であったが、ほぼ全身の部位を含む100点余の骨が採集された。産出した各骨は、左右の肋骨が俯せ姿勢での生体時の位置を保持していたが、前半身は体軸の右側に、脊椎骨の大部分は左側に移動しており、およそ3m×5mの範囲に分散していた(図3)。また、後位肋骨の周辺からは、推定体長4m(Randoll, 1973)のホホジロザメ(*Carcharodon carcharias*)の歯が一部肋骨に刺さった状態(図4)で産出し、中位肋骨には多毛類の生痕やハナシガイ類(*Thyasira* sp.)が散見された(図5)。これらのことから、遺骸の一部は長期にわたって海底に露出し、周囲に還元的環境を創成していたと推測される(Smith and Baco, 2003)。

海牛化石は、その形態と大きさからジュゴン科のダイカ

イギュウ(*Hydrodamalis* 属)に分類される(図6)。また、化石を産出した飯室累層の年代は、石灰質ナノ化石から1.36~1.10 Maとされる(小泉, 1990)。したがって、今回の発見は鮮新世のクエスタダイカイギュウ(*H. cuestae*)と中期更新世~現生のステラーダイカイギュウ(*H. gigas*)とをつなぐ時代の空白を埋めるものとして極めて重要である。なお、このダイカイギュウ化石は、国立科学博物館にNSM-PV 21844として所蔵されている。

文献

小泉明裕, 1990. 川崎市の上総層群飯室層(下部更新統)産アシカ科動物化石について. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (19), 45-66.

Randoll, J. E., 1973. Size of the Great White Shark (*Carcharodon*). *Science*, **181**, 169-170.

Smith, C. R. and Baco, A. R., 2003. Ecology of whale falls at the deep-sea floor. *Oceanography and Marine Biology: an Annual Review*, **41**, 311-354.

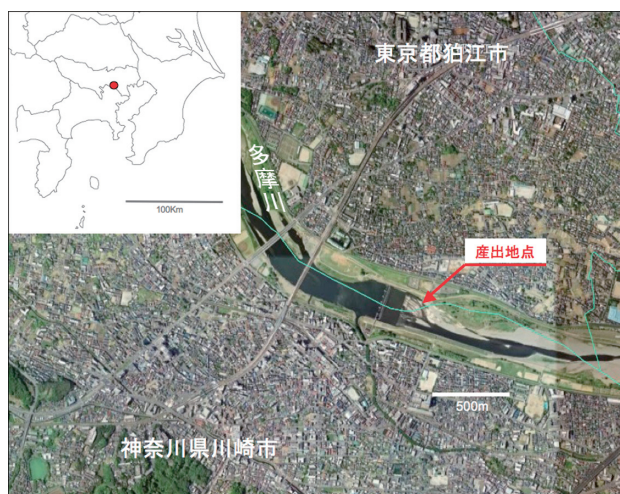


図1. ダイカイギュウ化石の産出地点. Google Earth マップ (© 2007 Digital Earth Technology/Zenrin) の東京都狛江市4km上空を使用。



図2. ダイカイギュウ化石を産出した河床. 肋骨など大半の骨格要素が、すでに河床面に剥出している。



図3. ダイカイギウ化石の産状復元図. 赤丸はホホジロザメの歯が産出した地点. 黄矢印で示した部分は多毛類の生痕が見られた部位. 略号: m, 下顎骨; v, 脊椎骨; ch, V字骨; r, 肋骨; st, 胸骨; sc, 肩甲骨; h, 上腕骨; u+r, 尺骨+橈骨; mc, 中手骨; p, 寛骨.



図4. ホホジロザメの歯の一部が刺さった状態の後位肋骨と、共産したホホジロザメの歯 (NSM-PV 21845). 枠内は刺さった歯 (太矢印) とほぼ等間隔に並んだ咬み跡 (細矢印).

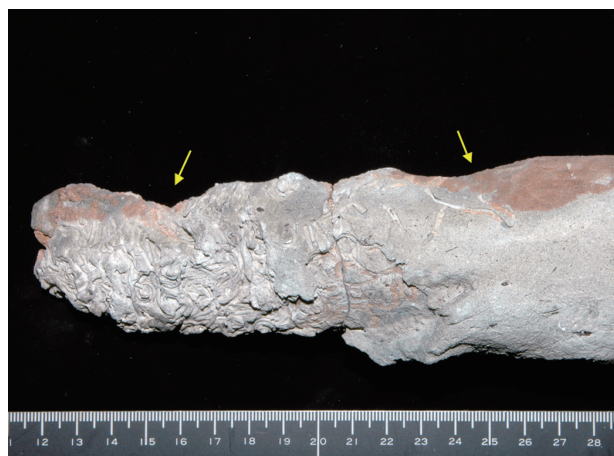


図5. 中位肋骨に見られた多毛類の生痕. 生痕の周囲の骨には、海底での分解を示す溶蝕痕 (矢印) も認められた.

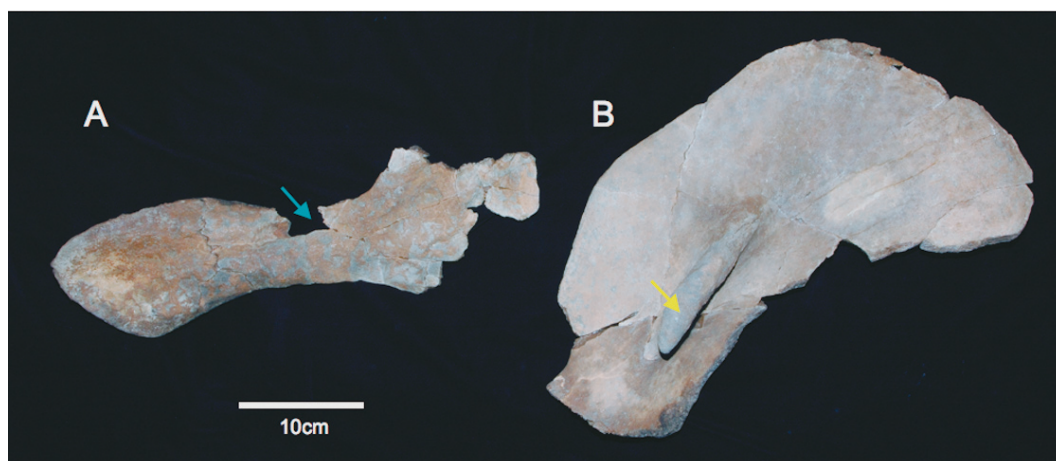


図6. ダイカイギウ化石の産出部位の一部. 左下顎骨 (A) では、歯が退化消失しており、オトガイ孔 (青矢印) が下顎体の後方に開口している. また、左肩甲骨 (B) では、肩甲棘 (黄矢印) が繊弱かつ肩甲骨のほぼ中央に位置している.